

日医ニュース

No. 1333
2017. 3. 20

発行所 **日本医師会**
Japan Medical Association

〒113-8621 東京都文京区本駒込2-28-16
電話 03-3946-2121(代) / FAX 03-3946-6295
E-mail wwwinfo@po.med.or.jp
http://www.med.or.jp/

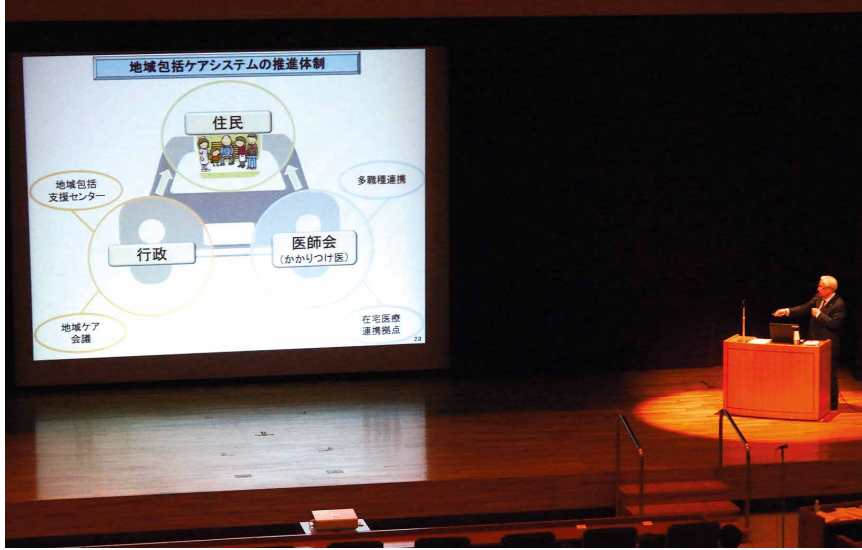
毎月2回 5日・20日発行 定価 2,400円/年(郵税共)

コンテンツ	● 定例記者会見	2面
	● 平成28年度母子保健講習会	4面
	● 勤務医のページ	8面

第18回都道府県医師会介護保険担当理事連絡協議会

「平成29年度介護報酬改定等」

「地域支援事業の推進」等について解説



都道府県医師会介護保険担当理事連絡協議会が3月1日、日医会館大講堂で開催された。当日は、「平成29年度介護報酬改定等」「地域支援事業の推進」「地域支援事業を活用した『まちづくり』への期待」の3つの議題に対して6つの講演が行われた。

事業の推進「地域支援事業を活用した『まちづくり』への期待」の3つの議題に対して6つの講演が行われた。

鈴木健彦厚生労働省老健局老人保健課長は、「平成29年度介護報酬改定等について」と題して講演を行った。

鈴木課長は、まず、介護職員の処遇改善のために行われた平成29年度の介護報酬改定について、事業者による昇給と結び付いた形でキャリアアップの仕組みを構築することを目的として、手厚い評価が行えるよう新たな区分を設けるとともに、①経験もしくは資格等に

一定の基準に基づき定期的昇給を判定する仕組み——などのキャリアパス要件を新設することになったと説明した。

また、在宅医療・介護連携推進事業と地域リハビリテーションの推進に

関しては、実施状況等にも触れながら、その目的等について改めて解説を行った。

「地域支援事業の推進」では、認知症施策の取り組みについて、渡辺憲鳥

取県医師会副会長が、「高齢者の自動車運転と認知症をもつ人を地域で支える取り組み」改正道路交

通法への対応を中心に「と題して講演し、まず、認知症をもつ高齢者の特徴について説明し

た。

また、「専門医だけでなく、日常生活等を把握しているかかりつけ医が中心となって、高齢者が地域において社会活動を継続できるように、支援する必要があり」として、

結果を報告。改正道路交

また、熊本地震発生時における大規模災害リハビリテーション支援関連団体協議会(JRAT)活動において立ち上げた「熊本復興リハビリテーションセンター」についても触れ、「その役割が大変重要であった」と報告した。

斉藤正身埼玉県医師会地域包括ケアシステム推進委員会地域リハビリテーション担当委員長は、「埼玉県における地域リハビリテーション支援体制」について、平成17年まで県の事業として行われていた地域リハビリテーション推進事業を、平成23年の東日本大震災をきっかけとして、

地域包括ケアの実現に向けた地域リハビリテーション支援体制として再構築することになった経緯と背景を説明。

地域リハビリテーション推進事業の主な活動である介護予防については、地域包括支援センターの業務と重複していることから、「支援体制の見直しを行い、地域リハビリテーション・ケアサポートセンターと協力医療機関等が連携をとり、

療養施設が連携をとり、遣や相談窓口、地域ケア会議、介護予防等の支援を行う人材を市町村の地域包括支援センターに派遣するシステムにしていく」と、その特徴を述べた。

池端幸彦福井県医師会副会長は、「在宅医療・介護連携推進事業」に関する福井県医師会等の取り組みについて、福井県医師会等が行政と共に実施している取り組みを紹介。

福井県では、認知症対策への新たな取り組みとして、①認知症検診の定着と認知症予防施策②医師等の人材育成と医療機関との連携体制の確立の推進を柱として掲げており、「福井県サポ

「地域支援事業を活用した『まちづくり』への期待」について説明を行った鈴木常任理事(写真)は、まず、診断を行った認知症患者が、その後自動車運転事故を起こした場合の医師の責任について、「通常、医師の刑事責任が問われることはない」と改めて強調するとともに、診断書の作成

に関して、「日医で作成した『手引き』をぜひ活用して頂きたい」と述べた。

また、今後の医療・介護の提供体制とまちづくりに関しては、高齢者の医療と介護の一体化は地域包括ケアシステムそのものであり、その担い手はかかりつけ医であると指摘。「地域包括ケアシ

地域支援事業への積極的な関与を

横倉会長

協議会は、松原謙二副会長の司会で開会。冒頭、あいさつに立った横倉義武会長は、平成30年度より全ての市区町村において実施することとなった地域支援事業について、「都市区等医師会の積極的な関与と都道府県医師会による支援が必要不可欠である」と強調。「地域で暮らす誰もが必要な

また、3月12日に改正道路交通法が施行されることに伴い、日医にも多数の問い合わせが寄せられていた、認知症高齢者の運転免許更新に関する診断書の作成について、この度、「かかりつけ医向け 認知症高齢者の運転免許更新に関する診断書作成の手引き」(以下、「手引き」)が完成したことを報告した。

続いて、鈴木邦彦・松本純二両常任理事の司会の下、「平成29年度介護報酬改定等」「地域支援

「地域支援事業の推進」は、認知症施策の取り組みについて、渡辺憲鳥取県医師会副会長が、「高齢者の自動車運転と認知症をもつ人を地域で支える取り組み」改正道路交

行政と医師会(かかりつけ医)が車の両輪となり住民を支えるべき

鈴木常任理事

「地域支援事業を活用した『まちづくり』への期待」について説明を行った鈴木常任理事(写真)は、まず、診断を行った認知症患者が、その後自動車運転事故を起こした場合の医師の責任について、「通常、医師の刑事責任が問われることはない」と改めて強調するとともに、診断書の作成に関して、「日医で作成した『手引き』をぜひ活用して頂きたい」と述べた。

また、今後の医療・介護の提供体制とまちづくりに関しては、高齢者の医療と介護の一体化は地域包括ケアシステムそのものであり、その担い手はかかりつけ医であると指摘。「地域包括ケアシ

「地域支援事業の推進」は、認知症施策の取り組みについて、渡辺憲鳥取県医師会副会長が、「高齢者の自動車運転と認知症をもつ人を地域で支える取り組み」改正道路交

「地域支援事業の推進」は、認知症施策の取り組みについて、渡辺憲鳥取県医師会副会長が、「高齢者の自動車運転と認知症をもつ人を地域で支える取り組み」改正道路交

17名の受賞者を表彰

第35回「心に残る医療」体験記コンクール表彰式



第35回「心に残る医療」体験記コンクール

6年前の受賞者と再会し、当時甲狀腺の病気で闘病されていた娘さんが、より良い医療と巡り合い、医師になった話を聞いたことを紹介。「本コンクールによっていろいろな人と結ばれているのだなという思いを強くした」と述べ、受賞者への祝意を表した。今回の「心に残る医療」体験記コンクールは、日本医師会賞受賞作品「聴診器とハーモニカ」については、「患者本人だけでなく家族も納得して受け入れられる最期のありよう、より良い終末期医療とは何かを改めて

第35回「心に残る医療」体験記コンクール(日医・読売新聞社主催)の表彰式が2月18日、都内で開催された。冒頭の主催者あいさつの中で、横倉義武会長は、

入賞者名一覧 (敬称略)	
一般の部	
厚生労働大臣賞 「三度目の手紙」	永倉 文子 (栃 木)
日本医師会賞 「聴診器とハーモニカ」	菱川 町子 (愛 知)
読売新聞社賞 「献体一捧げるといふこと」	織田桐真理子 (鳥 取)
入 選	
「飛べ、あの空に向って」	加賀 麗子 (埼 玉)
「似顔絵」	徳武 葉子 (長 野)
「繋いでもらった夢」	元山 歩菜 (兵 庫)
「宝物に出会えた」	川野 美緒 (和歌山)
「病気に対してだけでない医療行為とは～29枚のハガキ～」	谷 芳夫 (広 島)
「朝焼け」	平原 博 (鹿 児 島)
中高生の部	
最 優 秀 賞 「先生の不思議な言葉とその力」	小屋敷愛里 中3 (愛 媛)
優 秀 賞 「やりがいのある仕事」	大山 藍 高2 (茨 城)
「私の弟」	石川 瑞季 中1 (東 京)
「私の生きる世界」	堀内 愛華 高3 (神 奈 川)
小学生の部	
最 優 秀 賞 「ぼくの大好きな先生」	内村 駿太 小3 (福 岡)
優 秀 賞 「世紀の大発見をする日まで」	小田倉麗奈 小6 (東 京)
「先生、心から、ありがとう」	宮下 月希 小4 (新 潟)
「我が家のヒーロー」	吉瀬 茉城 小6 (大 阪)

が決定した」と経過報告を行った。

引き続き表彰に入り、「一般の部」では、厚生労働大臣賞、日本医師会賞、読売新聞社賞の3賞と、入選の受賞者に、続いて、「中高生の部」並びに「小学生の部」の最優秀賞、優秀賞の受賞者に、それぞれ賞状・副賞

が、一本コンクールは、昨年5月24日に募集を開始し、10月12日に締め切った。その結果、1600編という多数の応募があった(内訳は、「一般の部」が1381編、「中高生の部」が180編、「小学生の部」が39編)。第一次審査で142編、第二次審査で42編に絞られ、12月5日に行われた最終審査で、各賞

日本医師会賞

「聴診器とハーモニカ」

(全文掲載)

ひしかわ まちこ 愛知県稲沢市 72歳・日本語教師
菱川 町子



の授与が行われた後、作家の落合恵子氏が審査講評を行い、表彰式は終了した。

なお、今回の入賞作品17編は日医のホームページに掲載している他、例年どおり冊子としてまとめ、「日医雑誌」5月号に同封して全会員に送付する予定。

一度頭の中で繰り返したとたん、胸に熱いものがこみ上げてきて

「優しい人でした…」と言ったのが精いっぱいだった。

今までの医師も看護師も夫は患者でしかなかった。38年間動も止まらなかつた教師であることも、私にとってかけがえのない夫であることも治療には関係のないことであつた。

体温や血圧を測定し、点滴や薬を投与して、経過が良好であれば問題はなかった。脳が正常に機能しているかどうかをチェックするために名前や生年月日、そして100引

く7の簡単な計算を執拗に質問した。小学生でもできる簡単な質問に、きちんとして答えている姿は痛々しかった。

食事が喉を通らなくなり水分しか受けつけなくなった時、水分の摂取量を毎日必ず聞かれた。昨日1日で2500ccと答えるのは、絶望を確認するようであつたものだった。回診の度、張り詰めた

空気のなかで交わす会話に私はおびえ落ち込んだ。

そんな時、どんな人と聞かれたことでこの人は人間修理工場の技師ではなく、病気になる人だと感じ治してくれる人だと感じた。そして今まで一度も感じたことのない安心感を感じ、全てを彼に任せようと思つた。

「じゃあね。また明日。おやすみなさい」といつものように別れた次の日、夫は意識混濁となつてうつろな目で朝を迎えていた。目は開いては呼んでも返事はなかった。手を握って握り返す力はなかった。こんなと眠り続けたかと思つと、突然目をぱちぱち開いて遠い彼方を見ていた。私は焦つた。

言わなければならぬこととがあるのに、私の手の届かない世界に行つてしまったのだと思つと、悔やんでも悔やみきれなかった。

私は甘えることの手先な妻であつた。仕事で悩んでいても夫に相談したことはなく、自分だけでどうにもならぬ悔しさに、怒りをぶつけることとあつても、泣き言をいふのは誇りが許さなかつた。夫はそんな私を歯がゆく思つていたのであつた。

「お前は一人でも生きていけるよ」

ぼつりと寂しそうに言ったことがあつた。そんな気持ちに気づかず、素直にありがとうと言つたことがなかった。余命1か月と宣告されてから、いつかは言わねばと思いつつも、決心がつかず言ひそびれていた。

私が茫然と立ち尽くしている時、病室にやってくるH先生は、これで見識を取り戻した人がいた、とポケットからいつもの聴診器ではなくハーモニカを取り出した。手のひらに入つてしまふうなハーモニカは、夫が時折子供の頃を懐かしむように吹いていたそれと似ていた。H先生がハーモニカを口にあけると、素朴で温かい音が病室を包んだ。「うさぎ追いかの山…」聞き慣れた懐かしいメロディーは私の体を包み、心の奥までしみいるように流れた。どうか意識をとりもどしてくれませうと、と祈るような願いをのせて、ハーモニカの音はゆらゆら子守歌のように夫を包んでいった。H先生が病室を去つても故郷のメロディーの余韻が移り香のように残っていた。私は夫の手を握り言った。

「…お父さん…ありがとう。あなたと結婚できて私は幸せでした…」

夫の手がすかすかに動いた。夫の命が燃え尽きたような気がした。

きる日が刻々と近づいてくるのは確かだ。得体の知れない不気味な黒い壁が私に襲いかかってくるような、底なしの暗闇に引きずり込まれるような不安な日々だった。そんな時、H先生は言った。

「菱川さん。死ぬってことはそんなに悪いことではありませんよ」

初めは何を言っているのかわからなかつた。死ぬのは悪いことではないとは、医者が、しかも死を前にした人に言うべき言葉とは思えなかつた。なんて医者だろうと。しかし2、3日するとその言葉がだんだん体の中に入ってきた。人は誰でも死ぬ。ただ遅いか早いかだけで、どんな人も死から逃れることはできない。始まりがあるから終わりがあり、終わりがあ

るから新しい出発がある。H先生の言葉が地下水のように私の体を通り抜けた時、私は夫の死を受け入れることができ

た。あの黒い不気味な黒い壁が遠ざかつていった。今にして思う。H先生は絶妙なタイミングで私に死を受け入れる心の準備をさせてくれたのだ。夫の一周忌を済ませ、私は一人暮らしの新しい生活をスタートさせた。日本語教師養成学校に通い、2年間学んで資格をとり、現在モンゴルで若者に日本語を教えている。

「お前は一人でも生きていけるよ」

病状について質問されるとばかり思っていた私は戸惑い、答えに窮した。どんな人ですかと、もう

「ご主人はどんな人ですか」

病状について質問されるとばかり思っていた私は戸惑い、答えに窮した。どんな人ですかと、もう

平成28年度母子保健講習会

「思春期の子どものごころとからだを健やかに育むために」をテーマに

平成28年度母子保健講習会が2月19日、日医会館大講堂で開催された。温泉水川代常任理事の司会で開会。冒頭のあいさつで横倉義武会長(中川俊男副会長代読)は、社会全体で子育てしやすい環境を整え、未来を担う子ども達の健やかな成長を等しく保障するための施策が必要であることを強調。国においては「子ども・子育て支援新制度」が平成27年4月から始まったが、日医として、妊産婦から子育て期



「母子保健対策10年の歩み」と題して講演した今村定常任理事は、「子ども支援日本医師会宣言(平成18年)で掲げた、(1) 妊娠を望む人たちの支援、(2) より安全な妊娠・出産に向けての医療環境の充実、(3) 子育てに関する社会環境の整備、(4) 学校保健の充実、(5) 障害児への支援」など8項目の進展状況を総括。(3)の子育てに関する社会環境の整備に関しては、虐待の予防と早期発見のた

「母子保健対策10年の歩み」と題して講演した今村定常任理事は、「子ども支援日本医師会宣言(平成18年)で掲げた、(1) 妊娠を望む人たちの支援、(2) より安全な妊娠・出産に向けての医療環境の充実、(3) 子育てに関する社会環境の整備、(4) 学校保健の充実、(5) 障害児への支援」など8項目の進展状況を総括。(3)の子育てに関する社会環境の整備に関しては、虐待の予防と早期発見のた

「思春期女性アスリートの健康管理」について講演した能瀬さやか氏(東京大学医学部附属病院女性診療科・産科)は、まず、「アスリート」の定義について、トップ選手だけでなく、競技会に参加している人全てを指すとした上で、ドーピング検査等の基礎知識を解説。また、①無月経②骨粗鬆症③利用可能エネルギー不足—という、女性アスリートの三主徴を挙げ、疲労骨折の予防や競技生活後の健康のためにも、10代からの早期介入が重要であると指摘した。

特に、三主徴の起点に関してはエネルギー不足にあるとして、運動量に

「思春期の子どものために」をテーマに、引き続き、「思春期の子どものごころとからだを健やかに育むために」をテーマに講演3題(座長：神川晃日医母子保健検討委員会委員・日本小児科医学会副会長)が行われた。

「思春期の子どものために」をテーマに、引き続き、「思春期の子どものごころとからだを健やかに育むために」をテーマに講演3題(座長：神川晃日医母子保健検討委員会委員・日本小児科医学会副会長)が行われた。

「思春期の子どものために」をテーマに、引き続き、「思春期の子どものごころとからだを健やかに育むために」をテーマに講演3題(座長：神川晃日医母子保健検討委員会委員・日本小児科医学会副会長)が行われた。

「思春期の子どものために」をテーマに、引き続き、「思春期の子どものごころとからだを健やかに育むために」をテーマに講演3題(座長：神川晃日医母子保健検討委員会委員・日本小児科医学会副会長)が行われた。

「思春期の子どものために」をテーマに、引き続き、「思春期の子どものごころとからだを健やかに育むために」をテーマに講演3題(座長：神川晃日医母子保健検討委員会委員・日本小児科医学会副会長)が行われた。

「思春期の子どものために」をテーマに、引き続き、「思春期の子どものごころとからだを健やかに育むために」をテーマに講演3題(座長：神川晃日医母子保健検討委員会委員・日本小児科医学会副会長)が行われた。

「思春期の子どものために」をテーマに、引き続き、「思春期の子どものごころとからだを健やかに育むために」をテーマに講演3題(座長：神川晃日医母子保健検討委員会委員・日本小児科医学会副会長)が行われた。

「思春期の子どものために」をテーマに、引き続き、「思春期の子どものごころとからだを健やかに育むために」をテーマに講演3題(座長：神川晃日医母子保健検討委員会委員・日本小児科医学会副会長)が行われた。

「思春期の子どものために」をテーマに、引き続き、「思春期の子どものごころとからだを健やかに育むために」をテーマに講演3題(座長：神川晃日医母子保健検討委員会委員・日本小児科医学会副会長)が行われた。

平成28年度 女性医師支援事業連絡協議会

ブロック別に「女性医師支援」の取り組み等を報告



17日、日医会館大講堂で開催された。冒頭のあいさつで横倉義武会長は、「日本医師会女性医師バンクは、平成19年1月の開設以来、今年で10年を経過し、500件を超す就業実績を上げています」として関係者の尽力及び協力に謝意を示すとともに、相互理解を深め、本事業の一層の活

「思春期の子どものために」をテーマに、引き続き、「思春期の子どものごころとからだを健やかに育むために」をテーマに講演3題(座長：神川晃日医母子保健検討委員会委員・日本小児科医学会副会長)が行われた。

「思春期の子どものために」をテーマに、引き続き、「思春期の子どものごころとからだを健やかに育むために」をテーマに講演3題(座長：神川晃日医母子保健検討委員会委員・日本小児科医学会副会長)が行われた。

「思春期の子どものために」をテーマに、引き続き、「思春期の子どものごころとからだを健やかに育むために」をテーマに講演3題(座長：神川晃日医母子保健検討委員会委員・日本小児科医学会副会長)が行われた。

「思春期の子どものために」をテーマに、引き続き、「思春期の子どものごころとからだを健やかに育むために」をテーマに講演3題(座長：神川晃日医母子保健検討委員会委員・日本小児科医学会副会長)が行われた。

「思春期の子どものために」をテーマに、引き続き、「思春期の子どものごころとからだを健やかに育むために」をテーマに講演3題(座長：神川晃日医母子保健検討委員会委員・日本小児科医学会副会長)が行われた。

「思春期の子どものために」をテーマに、引き続き、「思春期の子どものごころとからだを健やかに育むために」をテーマに講演3題(座長：神川晃日医母子保健検討委員会委員・日本小児科医学会副会長)が行われた。

「思春期の子どものために」をテーマに、引き続き、「思春期の子どものごころとからだを健やかに育むために」をテーマに講演3題(座長：神川晃日医母子保健検討委員会委員・日本小児科医学会副会長)が行われた。

「思春期の子どものために」をテーマに、引き続き、「思春期の子どものごころとからだを健やかに育むために」をテーマに講演3題(座長：神川晃日医母子保健検討委員会委員・日本小児科医学会副会長)が行われた。

「セットで行うことが重要であり、人材確保に向けた企業戦略として考えていくべきとした。」

川県医師会の女性医師支援センターの活動や、愛知県医師会の「イクボス大賞」等を紹介した。

また、中部ブロックの今後の展望として、①中部7県担当理事の情報共有・連携活動等の強化②担当理事またはコーディネーター等のネットワーク構築等が必要とした。

近畿ブロック・三浦京都市医師会理事は、近畿ブロック会議の内容を報告。滋賀県医師会の医学士・研修医等サポート事業等、各府県医師会の取り組みを紹介した後、京都府医師会の活動として、医師のワークライフバランス委員会を発足し、①子育て支援事業②ホームページによる子育て支援情報等の発信③医学生・研修医等をサポートする会等——等の活動を検討している状況を説明した。

中国四国ブロック・今村孝子山口県医師会常任理事は、中国四国ブロック会議の内容を報告。鳥取県医師会の女性医師支援の取り組み等、各県医師会の活動を報告した。また、ブロック会議の担当として実施した介護に関するアンケート結果について、会員に対する介護支援の必要性があることなどを報告した。

九州ブロック・外間雪野沖繩県医師会女性医師部会副部長は、九州ブロック会議の内容を報告。長崎県医師会の「あじさいプロジェクト」等、各県医師会の取り組みを紹介した後、沖繩県医師会女性医師部会の活動について説明した。

また、ブロック会議当日に行われたディスカッション・情報交換会における代表的な意見を紹介した。

中国四国ブロック・今村孝子山口県医師会常任理事は、中国四国ブロック会議の内容を報告。鳥取県医師会の女性医師支援の取り組み等、各県医師会の活動を報告した。

また、ブロック会議の担当として実施した介護に関するアンケート結果について、会員に対する介護支援の必要性があることなどを報告した。

近畿ブロック・三浦京都市医師会理事は、近畿ブロック会議の内容を報告。滋賀県医師会の医学士・研修医等サポート事業等、各府県医師会の取り組みを紹介した後、京都府医師会の活動として、医師のワークライフバランス委員会を発足し、①子育て支援事業②ホームページによる子育て支援情報等の発信③医学生・研修医等をサポートする会等——等の活動を検討している状況を説明した。

九州ブロック・外間雪野沖繩県医師会女性医師部会副部長は、九州ブロック会議の内容を報告。長崎県医師会の「あじさいプロジェクト」等、各県医師会の取り組みを紹介した後、沖繩県医師会女性医師部会の活動について説明した。

また、ブロック会議当日に行われたディスカッション・情報交換会における代表的な意見を紹介した。

また、ブロック会議当日に行われたディスカッション・情報交換会における代表的な意見を紹介した。

また、ブロック会議当日に行われたディスカッション・情報交換会における代表的な意見を紹介した。

6府県医師会の発表後に行われた質疑応答・総合討論では、女性医師のキャリアパスの構築方法やイクボスの取り組み、ワークライフバランスを考慮した体制の構築に関する質疑が多く出されるなど、活発な意見交換が行われた。

(2)では、専任コーディネーターより、女性医師バンクが現在取り組んでいる4つの改革(①ホームページの刷新②広報活動の強化③登録者へのフォローの強化④都道府県医師会との連携強化)について概要が報告された後、協議会は終了となった。

当日の参加者は143名であった。

画像の提供は、時に夜間の異常行動を詳細に観察することができることでRBD(レム睡眠行動障害)の疑いから、レビ—小体型認知症やパーキンソン病の早期の診断に繋がることもある。

当然、BPSDへの対応は、個々の症状により異なる。尊厳を損なわないように配慮しながら、本人も不安な精神状態であることを理解しての言葉の掛け方の工夫、必要な介

護サービスの上手な利用、更に薬物調整などを行うが、なかなか一筋縄ではいかないのが現実である。

日常の認知症診療では、「介護の苦勞話をゆっくり聞いて欲しい」「生懸命、介護していることを分かって欲しい」「介護サービスを利用するのは、決して介護放棄するものではない」などの「家族の思い」を知ることの大切さを肝に銘じて行うように心掛けている。

平成28年度都道府県医師会事務局長連絡会 退職事務局長10名を表彰



その上で、「現在、都市区等医師会と日医の会員数の差は2万人を超えているが、この差をなくしていくことが組織強化に向けた大きな一歩になる」として、「医師年金への加入資格」を訴求ポイントとして、日医非会員や日医会員でも医師年金未加入の医師に対し、医師年金の良さを伝え、加入促進につなげて欲しい」と要望するとともに、医師年金に関する都市区等医師会事務局への理解促進についても協力を求めた。

平成28年度都道府県医師会事務局長連絡会が2月24日、日医会館小講堂で開催された。

今村定臣常任理事の司会で開会。冒頭、あいさつした横倉義武会長(今村聡副会長代理)は、「医師会活動の基本は地域医師会の活動にあり、各地域の実情を踏まえた地域医師会の取り組みを一層充実させていくことが、わが国の医療をより良きものへと発展させるための基礎になる」として、各都道府県医師会に対し、「全ての医師が医師会活動に積極的に参画し、活躍できるための環境整備について、より一層考えて頂きたい」と要望した。

その上で、医師会活動の目的は、「国民の健康と生命を守ること」にあると、日医の意見が全ての医師を代表するものであるという点を、組織率の面からも示していく必要があるとして、本連絡会が更なる活用に向けて説明した。

その後、(1) 医師年金の更なる活用に向けて、(2) 日本医師会女性医師バンクと都道府県医師会との連携——について、今村副会長が説明を行った。

その特徴については、「非営利、非課税、ローコストによる効率的な資産運用が可能である」「個々の医師のライフスタイルに合わせられる医師専用の年金である」「等、民間の商品に比べ有利になっている7つのポイントを強調した。

その上で、当日は、日医事務局より、次の大規模災害に備えるべく、「災害・緊急時の情報通信体制に関するアンケート」を各都道府県医師会に対して近日中に送付予定である旨の報告があった。

その上で、(1) 医師年金の更なる活用に向けて、(2) 日本医師会女性医師バンクと都道府県医師会との連携——について、今村副会長が説明を行った。

その上で、(1) 医師年金の更なる活用に向けて、(2) 日本医師会女性医師バンクと都道府県医師会との連携——について、今村副会長が説明を行った。

その上で、(1) 医師年金の更なる活用に向けて、(2) 日本医師会女性医師バンクと都道府県医師会との連携——について、今村副会長が説明を行った。

その上で、(1) 医師年金の更なる活用に向けて、(2) 日本医師会女性医師バンクと都道府県医師会との連携——について、今村副会長が説明を行った。

その上で、(1) 医師年金の更なる活用に向けて、(2) 日本医師会女性医師バンクと都道府県医師会との連携——について、今村副会長が説明を行った。

その上で、(1) 医師年金の更なる活用に向けて、(2) 日本医師会女性医師バンクと都道府県医師会との連携——について、今村副会長が説明を行った。



リズム

書籍紹介

ちよっと気になる医療と介護

権丈善一 著



本書は、平成28年に発刊された同じ著者の「ちよっと気になる社会保障」の続編である。

第1章「働くことの意味とサービス経済の意

味」では就業者数が増えている医療福祉分野について、生産性をキーワードにサービス経済の在り方を論じている。

第2章「人口減少社会と経済政策の目標」では、「人口が減少している日本では総GDPではな

く、1人当たりのGDPを指標とすべき」と述べている。

第3章からは、社会保障改革国民会議のメンバーとして、現在進行中の地域医療構想を提言した著者が、その理由を説明している。

また、第14章「相続財源は、どこに求めるべきなのでしょう」では、高所得者から所得税を徴収することで税収はそれほど増えない理由を解説している。

更に、巻末の「知識補給」には「医師偏在を解決する政策技術」なども紹介されており、一読をお薦めしたい一冊となっている。

定価 21600円(税込) 発行 勁草書房 03-3814-6861

保護者からの質問に自信を持って答える小児食物アレルギーQ&A

海老澤元宏 監修



本書は、日常臨床の現場において、食物アレルギー児を持つ保護者から日々投げ掛けられる「離

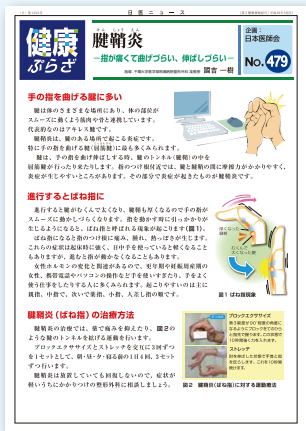
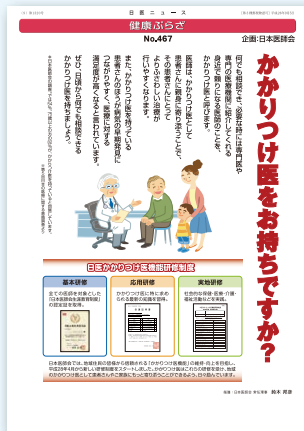
乳食の開始は遅らせた方がよいのでしょうか?」「食物アレルギー児が予防接種を受けて大丈夫なのですか?」「園や学校で給食を提供してもらう際に気をつけることは何ですか?」といったさまざまな質問に対し、具体的・簡潔に答える回答例と、最新の文献・ガイドライン等に基づく解説をまとめたQ&A集である。

監修者を始め執筆陣は、食物アレルギー診療

健康ぷらざに関するお知らせ

待合室等に掲示してご活用頂けるよう、本紙に月2回同梱している「健康ぷらざ」は、本年4月より、奇数月につきましては月1回(5日号のみ)となりますので、あらかじめご承知おき下さい。

日医広報課



循環器疾患最新の治療2016-2017 オンラインアクセス権付

堀 正一 監修 永井良三 編 伊藤 浩



「肺動脈血栓塞栓症に対するバルーン拡張術」など、注目すべき11テーマが取り上げられている。その他、本書では、冠動脈疾患を始め、心筋疾患など、主な循環器疾患の診断・検査から処方例を含めた標準的な治療法を解説。巻末には、薬剤一覧も収載されており、使いやすい。

本書は、最新の診療指針が分かるシリーズの循環器疾患版である。

巻頭には、トピックスとして、「心血管画像診断の進歩(心臓CT・MRI)」「PCIにおけるFFRの活用」「慢性心不全の新しい薬物療法」

定価 10800円(税込) 発行 南江堂 03-3811-7239

定価 4860円(税込) 発行 日本医事新報社 03-3292-1555

ご意見募集

日医では、組織強化に向けた広報にも力を入れるべく、広報委員会でその具体的な方策について検討を続けています。

会費の問題等、日医に入会しない理由はさまざまあると思われませんが、日医に入会して頂くためには、どのような広報が必要と思われるか、先生方が日頃感じていることなど、ご意見をお寄せ下さい。

抽選で10名の方に、「妊婦・小児」への投薬情報から「錠剤・カプセル剤」の粉碎可否情報まで、添付文書だけでは得られない、生きた情報が豊富に掲載された医薬品情報集『治療薬ハンドブック2017』（じほう発行）をプレゼントいたします。

なお、当選者の発表は、書籍の発送をもって代えさせていただきます。

◆応募方法

①住所②氏名③年齢④ご意見（必須）を明記の上、下記宛先まで、はがきまたはメールにて、ご応募下さい〔4月28日（金）消印有効〕。

◆応募・問い合わせ先

日医広報課
〒113-8621 文京区本駒込2-28-16 ☎03-3942-6483（直）
✉present@po.med.or.jp



日本医師会テレビ健康講座（香川県）

「住みなれた家で人生を送る ～在宅医療の今と未来へ～」を テーマに



「日本医師会テレビ健康講座」ふれあい健康ネットワークの収録が2

月19日に、香川県医師会並びに西日本放送の協力の下、テレビ局内のスタジオで行われた。

今回のテーマは、「住みなれた家で人生を送る」在宅医療の今と未来へ」で、番組では、高松市内や香川県の中山間地域で、医療・介護・福祉と連携しながら、それぞれ地域の実情に合った在宅医療に取り組む医師達のレポートを交え、県内の在宅医療の現状とこれからの課題が分かりやすく紹介された。

また、その中には、「住み慣れた自宅で普通の生活ができるよう、患者に寄り添って暮らしを支えたい」という在宅医療に

取り組む医師達の共通の思いが語られた。VTRで出演した榎村雅典香川県医師会常任理事は、「二人の在宅の患者に対して訪問診療や訪問介護の他、さまざまなサービスがあり、いろ

んな職種スタッフが連携して患者を診るのが在宅医療である」と解説した。番組に出演した久米川啓同県医師会会長は、「県内では在宅医療のシステムがまだ整っていない地域もあり、医療資源の乏しい地域でどのように対応していくかが今後重要になる」とした他、「在宅医療の未来を形づくる

上では県民と共に進めていくことが大切であり、在宅医療を含めた地域包括ケアシステムを充実させていくことが喫緊の課題である」と指摘した。同じく番組に出演した道永麻里常任理事は、香川県での取り組みを評価するとともに、「国では2025年に向けて、地域で予防・医療・介護・生活支援が一体的に受け

られるような地域包括ケアシステムの構築を目指しているが、日医はその中心的な役割を各地域の「かかりつけ医」が担うべきだと考えている」と述べ、かかりつけ医を持つよう視聴者に語り掛けられた。

審査員の田沼武能日本写真著作権協会会長は、入賞作品についての講評を述べるとともに、「ただ何となく撮った写真は見る人に感動を与えることはできない。感動を与えるためには、被写体に惚れ込んで撮ることが大事である。そうした写真には、魂が写っており輝いている。来年も素晴らしい作品を期待している」とした。

最後に、受賞者を代表して、最優秀賞を受賞した伊藤雅明氏が作品の撮影の経緯などを交えて謝辞を述べ、審査員の織作峰子氏が受賞作品に対する印象や審査の感想を語った。

第18回「生命をみつめる」 フォトコンテスト表彰式 2381点から29点 が選ばれる



麻里常任理事が出席した。冒頭、主催者を代表してあいさつをした横倉義武会長（松原副会長代読）は、約2400点の応募があったことに謝意を示した上で、「生命の輝く一瞬をとらえた素晴らしい作品ばかりで、特に今回は、思わず

「身近で頼りになる「かかりつけ医」を持っている患者さんの方が病気の早期発見にもつながりやすいと言われている。賞が授与された。

売新聞社賞、審査員特別賞各1名、入選5名、佳作20名の受賞者の代表12名に、それぞれ賞状・副賞が授与された。

なお、入賞作品は今号11、12面の他、日医ホームページにも掲載しているので、参照されたい。

審査員の田沼武能日本写真著作権協会会長は、入賞作品についての講評を述べるとともに、「ただ何となく撮った写真は見る人に感動を与えることはできない。感動を与えるためには、被写体に惚れ込んで撮ることが大事である。そうした写真には、魂が写っており輝いている。来年も素晴らしい作品を期待している」とした。

最後に、受賞者を代表して、最優秀賞を受賞した伊藤雅明氏が作品の撮影の経緯などを交えて謝辞を述べ、審査員の織作峰子氏が受賞作品に対する印象や審査の感想を語った。

第18回「生命をみつめる」フォトコンテスト（日医・読売新聞社主催）の表彰式が3月4日、都内で開催され、日医からは、松原謙二副会長、道永

笑みがこぼれてしまうものや心温まる作品が多かった」と、受賞者に対して祝意の言葉を述べた。また、「かかりつけ医を持つことの大切さに触

られるような地域包括ケアシステムの構築を目指しているが、日医はその中心的な役割を各地域の「かかりつけ医」が担うべきだと考えている」と述べ、かかりつけ医を持つよう視聴者に語り掛けられた。

審査員の田沼武能日本写真著作権協会会長は、入賞作品についての講評を述べるとともに、「ただ何となく撮った写真は見る人に感動を与えることはできない。感動を与えるためには、被写体に惚れ込んで撮ることが大事である。そうした写真には、魂が写っており輝いている。来年も素晴らしい作品を期待している」とした。

最後に、受賞者を代表して、最優秀賞を受賞した伊藤雅明氏が作品の撮影の経緯などを交えて謝辞を述べ、審査員の織作峰子氏が受賞作品に対する印象や審査の感想を語った。

なお、入賞作品は今号11、12面の他、日医ホームページにも掲載しているので、参照されたい。

日本医師会 医師年金

医師年金は、日本医師会が運営する医師専用の私的年金です。

日医会員で満64歳6カ月未満の方が加入できます（申し込みは64歳3カ月までをお願いします）。

ホームページを参考に、加入をご検討下さい。

医師年金 検索 <http://www.med.or.jp/nenkin/>

ご加入時の受取年金額のシミュレーションが可能です
＜トップページ→シミュレーション＞

年金専門誌「年金情報」で管理運用体制が高く評価されました
＜トップページ→お知らせ＞

お問い合わせ・資料請求等
日医年金・税制課 ☎03-3942-6487（直）（平日9時半～17時）

勤務医のページ

北海道医師会の女性医師支援等の取り組みについて

北海道医師会常任理事／日医勤務医委員会委員 藤井美穂

女性医師の支援は、懇談会や現況調査の段階から具体的なAction Planの段階へと移行してきているが、北海道では、医師会と道内3医大と連携しながら種々の活動を展開している。

女性医師等支援相談窓口

北海道医師会では、2011年に女性医師等支援相談窓口を開設し、仕事と家庭の両立を支援するための助言・情報提供、復職のための研修受

入医療機関の紹介、医師の離職防止や再就業の促進など、さまざまな視点から支援を行っている。更に、窓口事業の周知を目的として、道内の臨床研修指定病院への訪問事業を開始した。管理職、指導医、事務部門の参加の下、研修医や若手医師へ就労環境づくりの支援事業と女性医師等支援相談窓口の説明を行い、相互の意見交換を行っている。

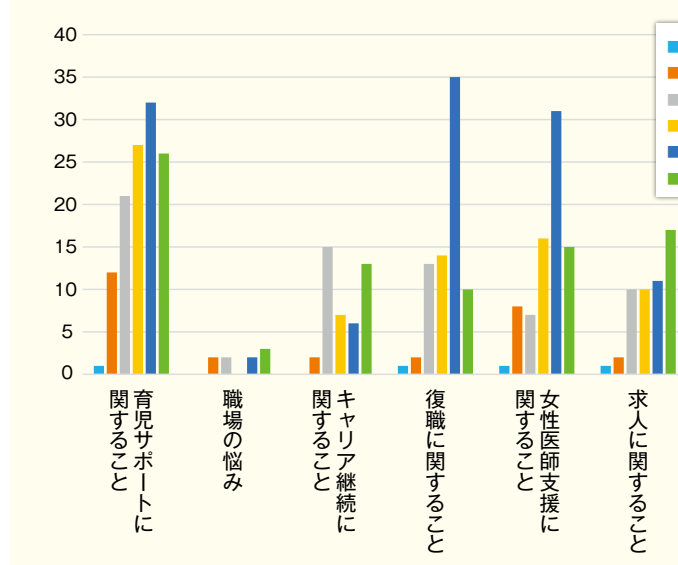


図1 主な相談内容の年次推移

本事業は、開設時から相談件数の多い育児サポートに加え、転勤後や道外医師が北海道へ転居する際の相談など、復職に関する相談が増えてきている（図1）。

育児支援：北海道医師会と育児サポート事業者の間で契約と事前登録を済ませ、医師の急な出張や仕事が終わらないなどの緊急時の預かりを行う事業である。

図2にあるように、利用者や支援事業者、北海道医師会の三者による面接を行い、年会費・登録料を当会が負担している。お子さんの発熱などで保育園からの連絡があった場合の園へのお迎え、親のお迎えまでの待機など、病気時の利用が多い。

本事業は非会員医師でも利用可能であるが、原則、会員限定で、病児・病後児預かりの利用料の一部を医師会が負担する事業も展開している。

復職支援：復職を目指す女性医師等に対して、復職研修事業を2012年に開始した。これまでに、23年間研究職に従事していた男性医師が臨床医としてのキャリアの意欲、地域医療を守るためにどうするか、という内容にシフトしてきた。また、医師会と連携して地域活動を行っていきたいという希望が出されるようになってきた。この要望を受け、「北海道の地域医療を考える若手医師ワーキンググループ」を2016年に設置した。

将来、地域医療を支える医学生、若手医師のEarly Exposure(エアー、活動の企画・運営を担ってもらっている)。

北海道医師会の勤務医比率は70%を超え、女性医師支援に限らず勤務医の勤務環境の改善が重要となっており、本センターと協力しながら事業を展開している。

部下・スタッフのワークライフバランスを考えた、キャリア形成を応援する優秀な「育ボス」を養成するための「育ボスセミナー」、「医療勤務環境改善セミナー」や「チームや暴力に対して腰の引けない医療を実践・実現するためのセミナー」などを開催している。

北海道医師会常任理事／日医勤務医委員会委員 藤井美穂

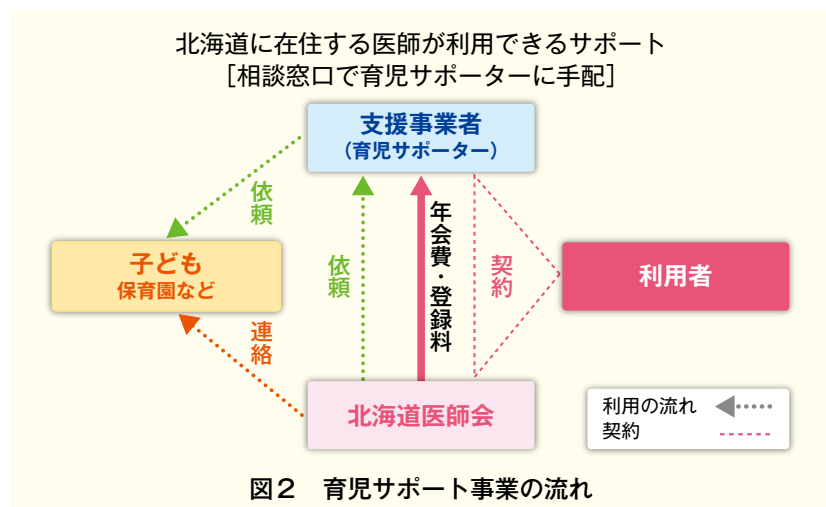


図2 育児サポート事業の流れ

北海道に在住する医師が利用できるサポート [相談窓口で育児サポーターに手配]

支援事業者 (育児サポーター) と 利用者 との間に「契約」があり、支援事業者は「依頼」を受けて「子ども 保育園など」にサポートを提供する。また、支援事業者は「北海道医師会」と「連絡」を取り、医師会からのサポートを受ける。利用の流れは「利用者」から「支援事業者」を経て「子ども 保育園など」へと進む。

新たな専門医の仕組みの立ち上げは、最も重要な専門医の定義以外に、10年が経過した現在、女性医師のキャリア支援から男性医師も含めて医師のキャリアの意欲、地域医療を守るためにどうするか、という内容にシフトしてきた。また、医師会と連携して地域活動を行っていきたいという希望が出されるようになってきた。この要望を受け、「北海道の地域医療を考える若手医師ワーキンググループ」を2016年に設置した。

将来、地域医療を支える医学生、若手医師のEarly Exposure(エアー、活動の企画・運営を担ってもらっている)。

北海道医師会の勤務医比率は70%を超え、女性医師支援に限らず勤務医の勤務環境の改善が重要となっており、本センターと協力しながら事業を展開している。

部下・スタッフのワークライフバランスを考えた、キャリア形成を応援する優秀な「育ボス」を養成するための「育ボスセミナー」、「医療勤務環境改善セミナー」や「チームや暴力に対して腰の引けない医療を実践・実現するためのセミナー」などを開催している。

これをビジネスチャンスと考へ、大学病院などの勤務医を集めて対応しようとする企業も現れつつある。町の診療所で診ていた患者の最後の看取りだけを、事情を知らない病院勤務医がアルバイトとして引き受けるという形がそのまま進めば、急性期病院は意図しない形で、在宅医療に関与することになる。

地域包括ケアは、地域の患者が住み慣れた地域でシームレスに必要な医療を受けられることを目指している。そのためには、患者の診療に際して、その思いを尊重してベストを尽くすという価値観を期待している。

地域医療構想策定の場で地域の医療者の話し合いをうまく進めるためにも、「プロフェッショナル」という言葉で結び付く医師が全員加入する医師会」ができればことを期待している。

新たな専門医の仕組みが共有しなければならぬはずだ。

新たな専門医の仕組み問題で注目を浴びるようになった「プロフェッショナル」という言葉には、「医師は専門教育を受けて、組織化された団体に所属し、奉仕の心と共通の倫理観を持つべき」という意味も込められていると思う。

勤務医のひろば

今、勤務医部会に期待すること

独立行政法人 地域医療機能推進機構中京病院院長 絹川常郎



待遇が不安定なことや、保険医の認定に絡めて医師の配置をコントロールしようとする国の思惑が絡んで、複雑な様相を呈している。プログラムによっては、身分保証のない中で細切れの異動を求められる若手医師も少なくない。彼らの要望を取り上げる全国組織の団体が必要であり、私は勤務医部会にぜひその役割を担って欲しいと考えている。

在宅介護連携は地域包括ケア推進の中心にあるが、行政からの依頼で地域の医師会が主導するこの事業が、都市部ではなかなかうまく進まない。

これをビジネスチャンスと考へ、大学病院などの勤務医を集めて対応しようとする企業も現れつつある。町の診療所で診ていた患者の最後の看取りだけを、事情を知らない病院勤務医がアルバイトとして引き受けるという形がそのまま進めば、急性期病院は意図しない形で、在宅医療に関与することになる。

地域包括ケアは、地域の患者が住み慣れた地域でシームレスに必要な医療を受けられることを目指している。そのためには、患者の診療に際して、その思いを尊重してベストを尽くすという価値観を期待している。